

てこな・ミュージック・ジャーナル

悪魔のヴァイオリン

ベネチア体験

春近くなりますと、どこか遠くへ行きたいと思われる方も多いのではないのでしょうか?ヨーロッパ旅行目的地ランキング上位にはバリ、ローマなどがもちろん入っていますが、個人的にはベネチアを押ししたいと思います。湾の中の干潟に点在する島々ベネチアに行くのは船が便利です。島の中ではゴンドラで運河巡り、その情緒には格別のもものありますが、そんな場所ですから水没の危機にいつもさらされています。

運河の臭いに苦しめられることなく、そして海水がひたひたと上がってきているために木の板が渡された歩道を歩かずにすむ旅行者は、とても幸運だと言われています。数年前にそんな幸運な一人になれた私は、海も空もまさに青い強烈な光のもとサン・マルコ広場の鐘楼に登り、ベネチアの街を見下ろした感動はとても言葉にできないほどでした。

ベネチアに眠るストラヴィンスキー

今回はこのベネチアに魅せられた多くの芸術家から一人を選んでお話してみたいと思います。その名はイーゴリ・フョードロヴィチ・ストラヴィンスキーです。名前の響きからお分かりのようにロシア人で、20世紀最大の音楽家と評され、その代表作「春の祭典」は演奏会用レパートリーとなっています。

そのストラヴィンスキーが1971年に89歳の生涯を終えて葬られたのは、愛するベネチアの地、海の中に浮かぶ墓地専用のサン・ミケーレ島でした。ベネチアは不思議な場所です。120ほどの島の中には、墓地専用、そしてゴミ専用の島があるのです。

兵士の物語

さてストラヴィンスキーは、強烈で変則的なリズム、大音響、それでいて新古典主義的な美しいメロディーも聞かせる、新しい時代の音楽でありながら、同時代に称賛される作曲家という非常に稀有な才能の持ち主として音楽史上に輝く星となっています。ピアノ独奏、歌曲、オペラ、バレエ音楽とその音楽分野は非常に多様で、作品を論じ出したらきりがありません。音楽素材にロシア民謡、そしてアメリカのジャズ、題材としての物語りにはアンデルセン童話、ロシア民話、ギリシャ悲劇と、列挙しだしたら大変で

市川市文化振興財団 音楽総合プロデューサー 小坂 裕子

す。芸術家としてのエネルギーは無尽蔵、どの作品も語ることを待っているといった内容と音響にあふれています。そのような作品群の中から今回はあまり知られていない「兵士の物語」を選んでみました。選んだ理由はヴァイオリンが重要な役割を与えられているからです。主人公は兵士そして悪魔です。

ヴァイオリンに魂を売った音楽家たち

音楽史の中にヴァイオリンの演奏技巧に全てをかけているかのような演奏家が時に登場します。命と引き換えてでも夢の中で懇願して「悪魔のトリル」を手に入れたという作曲家がタルティーニ(1692 ~ 1770)です。同じ時代のコレルリの「ラ・フォリア」、主題を高音で呈示し、23に及び変奏は、ヴァイオリンに許される音響と駆使できる技巧全てを披露します。そして人間業とは思えないヴァイオリンの名曲という、やはり17世紀後半に活躍したヴィターリの主題と20の情熱的な変奏からなるシャコンヌでしょうか。そして最後に19世紀のイタリア人のヴァイオリン音楽家の名を出さないわけには行きません。

パガニーニ

長く黒い髪、痩身、青白い顔、眼には暗い光、前かがみ、右肩を下げ、全身を揺らしながら演奏したと伝えられています。神業のように弦の上を指が目も止まらぬ速さで移動。感動のあまり演奏を聞く人たちが眼を丸くして口をばかんと開けている絵も残っています。誰も真似できない奏法ばかりを繰り出し、日常もスキャンダルで歪められました。若い頃に妻を殺して投獄され、獄中で才能を磨いたとか、死者のために墓地で毎晩演奏しているなど、呪われた宿命の鬼才と書きたてられました。

命を奪うヴァイオリン

ストラヴィンスキーの「兵士の物語」、その主人公は軍隊を脱走した、しがたない兵士です。でもヴァイオリンを取り出し演奏すると、聴いていた悪魔から望みが何でも叶う魔法の本と交換しようと誘惑される程の腕前。それが災いして悲惨な運命に取り込まれていきます。「兵士の行進曲」「悪魔の踊り」が音楽的土台となって何度も繰り返される非常に面白い作品です。これを聞いたときに、超絶技巧であるがゆえに翻弄されたかのようなパガニーニの人生に思いを馳せます。兵士が悪魔に奪われたのはヴァイオリンではなく命でした。パガニーニは魂を悪魔に奪われたとの謗りを免れずに死んでいきます。教会墓地への埋葬は拒否され、安息の場所を得るのに36年もかかってしまいました。